

対馬方言の性格

奥村, 三雄
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/7178711>

出版情報 : 九州文化史研究所紀要. 18, pp.83-121, 1973-03-31. Kyushu Bunkashi Kenkyusho, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



対馬方言の性格

奥村三雄

目次

- 一 はじめに
- 一― 資料について
- 二 対馬島内の地域差
- 二― 地域差に関する問題点
- 三 対馬方言の特異性
- 四 対馬方言の系統―筑前方言との共通性
- 四― 豊前・筑前・肥前各方言との相関性
- 四― 二 いわゆる対馬方言の非九州弁的要素について
- 付 「桑実」および「井戸」の方言分布図

一 はじめに

対馬の方言に関しては従来、竹敷漁史氏「対馬方言」（『風俗画報』明31年）あたり以下、滝山政太郎氏『対馬南部方言集』（昭19『全国方言集』七）等々、かなりの記述が認められるし、『人文』1号（昭26、日本文科学会）や『対馬の自然と文化』（昭29、古今書院）などでは、八（九）学会連合調査における対馬方言の調査報告が行われている。―音韻（金田一春彦・山本謙吾・三根谷徹）、語彙（泉井久之助・堀井令以知・奥村三雄）、語法（吉町義雄）― また新しくは、国立国語研究所編の『日本言語地図』1集～5集の如きも参考になる点が多い。

しかし、九州諸方言―更には日本語諸方言―との相関性の問題等々、対馬方言の性格については、なお研究の余地が対馬方言の性格

対馬方言の性格

かなり残されている。例えば、「対馬方言は語彙的に見て、全島が比較的齊一である」（『対馬の自然と文化』105頁）「対馬は各部落間の語形の差が殆んどなく一様である」（『人文』1号67頁）、「対馬の方言は大体において、珍奇なものが多い」（同65頁）、「対馬方言は、語法的には豊前豊後に近い」（同65頁）、「語法に関する限り、豊日地方に似て九州味が稀薄」（同72頁）という様な記述がしばしば認められるが、それぞれ問題が残されるのである。『国語学』17集の拙稿にひき続き、ここで対馬方言の性格に関する若干の考察を試みようとする所以である。

一 資料について

本稿の資料は概ね、昭和25年夏（八学会連合、泉井久之助氏・堀井令以知氏と共同、語彙が中心）、昭和26年夏（九学会連合、方言関係は筆者のみなる為、音韻・語彙・語法の諸面にわたる）、昭和37年秋（個人的調査）における臨地調査の結果を主とするが、その他、対馬出身者数名につき福岡（昭44・昭47）で調査した結果なども、参考資料として用いる。

以下、参考までに、私の調査地点名（調査当時）を表示しておこう。

上県郡

豊崎町トヨサキ 鰐浦ウニウラ・大浦オウウラ・比田勝ヒタカツ・津和原ツワハル・唐舟志トウジュウシ・豊トヨ。
佐須奈村サスナ 佐須奈サスナ・佐護サゴ・湊ミナト・井口イヅチ。
琴村キン 舟志シユウシ・琴キン・一重ヒトエ・小鹿オジカ・葦見アシミ。
仁田村ニタ 伊奈イナ・仁田ニタ・鹿見シシミ・志多留シタル・飼所カイヤコロ。
峯村ミネ 志多賀シタカ・賀佐カサ・三根ミネ・櫛グシ・佐賀サカ・吉田ヨシダ。

下県郡

奴如岳村^{ヌカダク} 佐保^{サホ}・貝口^{カイグチ}・廻^{マワリ}・卯麦^{ウムギ}・小綱^{コズナ}・銘^{メイ}・唐州^{カラス}。

仁位村^{ニイ} 曾^{ソウ}・仁位^{ニイ}・佐志賀^{サシカ}・嵯峨^{サカ}・水崎^{ミズサキ}・和板^{ワイタ}・塩浜^{シオハマ}・千尋藻^{チロモ}。

船越村^{フナエ} 鴨居瀬^{カモイゼ}・小船越^{コフナゴシ}・大船越^{オオフナゴシ}・赤島^{アカシマ}・芦ヶ浦^{アシウラ}・賀谷^{ガヤ}。

鶏知町^{ケチチ} 竹敷^{タケシキ}・鶏知^{ケチ}・加志^{カシ}・今里^{イマザト}・根曾^{ネソ}・樽ヶ浜^{タルハマ}・洲藻^{スモ}・昼ヶ浦^{ヒルウラ}。

巖原町^{イズハラ} 小浦^{コウラ}・巖原^{イズハラ}・曲^{マグリ}。

佐須村^{サス} 阿連^{アレ}・小茂田^{コモダ}・上槻^{コノツキ}・久根浜^{クネハマ}・久根田舎^{クネイナカ}・下原^{シモバル}・樫根^{カシネ}・日掛^{ヒカケ}・椎根^{シイネ}。

久田村^{クダ} 久田^{クダ}・安神^{アガミ}・内山^{ウチヤマ}・久和^{クワ}・豆酸瀬^{ツツナイシン}・豆酸内院^{ツツナイイン}。

豆酸村^{ツツ} 豆酸^{ツツ}・浅藻^{アザモ}。

この場合、地点名は概ね、昭和25・26年頃のものによったが、これは、本稿の資料の大部分が、その頃の調査に基づくからである。なお、かかる方言分布相を説明する為には、或程度古い行政区分による地名の方が適当である事など言をまつまい。

各地点の位置関係については、本稿の最後に参考として掲げた「桑実」及び「井戸」の方言分布図を参照されたい。

調査方法に関しては詳述しないが、八学会連合調査（昭25年度）の場合については、『人文』1号64頁以下で或程度述べられているし、九学会連合調査（昭26年度）の場合については、『国語学』17集及び『対馬の自然と文化』427頁以下の拙稿で述べた事がある。なお、前者は、泉井・堀井両氏と共同の語彙調査班であったが、後者の場合は、私一人であった為、むしろ、音韻や形態素（ヴァンドリエスの用語、以下同様）的語形式―いわゆる語法の面―の調査に重点をおき、意義素（ヴァンドリエスの用語、以下同様）的語形式の補い調査をあわせ行った。また、昭37年度の調査は比較的短期間であったが、アクセント調査を中心とし、その他の面の補い調査をあわせ行った。

対馬方言の性格

対馬方言の性格

使用した調査票は、概ね、東条操氏の『簡約方言手帳』（郷土研究社、昭6）に基づきつつ、それに若干の手を加えたものである。

被調査者としては、それぞれの土地生えぬきの老人を中心としたが、位相差などを考慮して、数人集って頂いた場合が多い。なお、対馬においては、幸いに、各地の居住者の多くが、被調査者としての資格者つまり、他地域での生活が一年以上にわたらないであつた。

また、本稿では、対馬方言の性格を明らかにする為、対馬以外の諸方言をしばしば参照したが、それらに関しては、私の調査が不十分である為、諸氏の御報告を利用して頂く所が多かつた。中でも、東条操氏編『全国方言辞典』（昭26、東京堂）、同編『分類方言辞典』（昭29、同）、国立国語研究所編『日本言語地図』1巻～5巻（昭41～昭47）などは、特に参照する所が多かつた。

二 対馬島内の地域差

まず、対馬島内の言語差について見るに、例えば、下記(イ)～(ニ)の如き地域差がかなり認められる。それらの地域差を大きいと見るか小さいとするかは水掛論であるが、この小さな（面積からも人口からも）島の内部に、下記のような差がいろいろ認められる（下記(イ)～(ニ)の挙例はその一端にすぎない）という事は、決して無視できないはずである。隣りの宍岐が、全島殆んど同じ方言形を用いている事などよく考え合わすべきであろう。

(イ) 下県南端の豆酲（及びその付近）は、言語的特徴が著しい。左記①～⑧はその一例であるが、この場合、その特異性には、いわゆる意義素的語形式のみならず、音韻・アクセントや形態素的語形式などの面の特徴も、相当ふくまれている点見逃せまい。

① アクセント——二拍名詞の場合、豆酸では福岡方言などと同様、いわゆる一類(庭^ニ)・二類(川^カ)と、三類(山^{ヤマ})とが合併しているが、島の大部分では、一類・二類と、四類(笠^{カサ})・五類(雨^{アメ})とが合併している。この辺の事情につき詳しくは、『人文』1号78頁・『対馬の自然と文化』91頁の金田一春彦氏記述や、平山輝男氏『九州方言音調の研究』273頁などを参照されたい。

② 豆酸では、アイ(蟻)・ソイ(それ)など、語中尾のリ・ル・レに該当する音節が、しばしばイ音になる。これに対し、厳原など島の中央部では、語中尾のリ・ル・レが概ね変化しないし、また、島の周辺部では、語中尾狭母音の弱化脱落傾向が著しいが、リ・ル・レがイ音に変わる事は稀である。

③ 豆酸では、アンミカンナスイーテ(あのみかんは酸っぱいから)・コンニャヒエーテ(今夜は冷えるから)など、順接助詞にテを用い、島大部分のケン・ケーと対立する。なお・酸^スウテ・冷^ヒエテの如き連用形接統のテは共通語その他にも存するわけであるが、豆酸のテは終止形接統である点興味深い。デの清音化形と見るべきか。

④ 豆酸における甘諸のトーイモ形は、島大部分のコーコイモ形と対立する。

⑤ 豆酸におけるとかげのトーゲ形は、他地域におけるトカゲ・トカギリなどの形と対立する。cf.『日本言語地図』224図の場合、豆酸のトーゲ形は示されていない。

⑥ 亀(小さなもの)のイシガメ形は、島大部分のコーズ・クーズ形と対立する。

⑦ 咽喉のノード形は、島大部分のノドンス形と対立する。

⑧ 飯櫃のハンボン形は、島大部分のメシツギ形と対立する。等々。

(ロ) 前記豆酸の他、周辺部諸地域では、厳原など島の東海岸中央部との言語差が著しい。左記①～⑩は、音韻や形態素的な面におけるその一例である。

対馬方言の性格

- ① kwa 音⇨周辺部には、クワジ(火事)などのクワ(kwa)音が存するが、厳原その他では稀。
 ② se 音⇨周辺部では、シェ(瀬)・アシエ(汗)の如きシェ(se)音が著しいが、厳原などでは稀。
 ③ ai 連母音⇨周辺部では、ヘー(蠅)・ヒテীগチ(額)の如き融合長音(e:)化が著しいが、厳原などではそれが稀。

④ 語中尾狭母音⇨周辺部では、カム(kam・紙)・ボーッラ(bo:lra・南瓜)の如きi・uの弱化消滅傾向が著しいが、島の中央部ではそれが稀。

(注) ムの如き表記は、母音の無声化または弱化消滅を示す。以下同様。

⑤ 上二段動詞⇨周辺部には、起クル・落ッル形がかなり存するが、厳原その他では大ていオキル・オチル(or オテル)形。

⑥ マ・バ行四段完了形⇨周辺部ではトーダ(飛)の形が著しいが、島中央部は大ていトンダ形。

⑦ サ行四段完了形⇨周辺部ではオトイタ・オテータ(落)の如き形が多いが、島中央部は概ねオトシタ形。

⑧ 敬語辞⇨周辺部は見ラル(ル)形が多いが、厳原などでは見ラシヤル・見ラ(orナ)ハルの如き形が多い。

⑨ 逆接助詞⇨周辺部はバッテ形が多いが、島中央部は概ねケツ(orン)ド形。

⑩ 目的格助詞⇨周辺部にはホンバ(本を)の如き形が存するが、島大部分は、ホンヲバ・ホンヲ(orノ)などの形が普通である。

⑪ その他、意義素的な面の語形差については後述(二)の諸例を参照の事。

(イ) 対馬には、水崎(旧仁位村)・赤島(旧船越村)・浅藻(豆酸村)等々、比較的新しい時期に、本州一特に、山口県や広島県など一人が集団的に渡来して開いた部落も相当存するが、それらの部落において、非対馬方言的特色が著し

い事は言をまつまい。

先ず、それら諸部落のアクセント体系が概ね、広島や山口と同様の山陽式である事は、金田一春彦氏説（『人文』1号84頁）の如くである。

その他の諸現象においては、アクセントの場合ほど純粹でなく、隣接地域との言語交渉が或程度認められる様であるが、しかし、全体としてはやはり、山陽方言的特色が著しい。左記①⑩は、浅藻方言の意義素的語形式が、隣接（豆酺村・久田村）諸部落のそれに比し、孤立しているものの一例であるが、それぞれ概ね、山陽方言的性格が著しい様である。

① キノンバン（昨夜）——cf. 多くの地域ではキノンバンが一昨夜を意味する。

② ヤブ（藪）——cf. 多くの地域ではヤボ・ヤブゾーなど。

③ コーキチ（梟）——cf. 他地域はネコドリ・シモヨビなど。

④ トンボ（蜻蛉）——cf. 他地域はエンバなど。

⑤ ギイス（飛蝗）——cf. 他地域はチョンマその他諸形を用いる。

⑥ アリ（蟻）——cf. 他地域はアリムシなど。

⑦ イモ（甘藷）——cf. 他地域はコーコイモなど。

⑧ ケチ（吝嗇者）——cf. 他地域はガンドーなど。

⑨ サシミ（刺身）——cf. 他地域はナマミ・セギリなど。

⑩ オヒツ（飯櫃）——cf. 他地域はメシツギなど。

⑪ シバク（叩く）——cf. 他地域は大ていシワク。

⑫ コンブル（潜る）——cf. 他地域は大ていカズク。——なお、中国・四国地方でコブルは、主に、「水中を歩いてわたる」

事を意味する様である。

対馬方言の性格

対馬方言の性格

(二) 対馬方言の地域差いろいろ——対馬方言に関しては、前記(イ)の他にもいろいろな地域差が認められる。以下、その辺の事情を示す為、やや蛇足ながら、具体例を列挙してみよう。なお、左記①(129)の諸例は、或面で、対馬方言に関する地域差の整理という様な意味をも持つ。前記(イ)の諸項でとり上げた事例と重複するものもかなり存するわけである。

① 起きる $\parallel$ オキル(多い) オクル(比田勝・佐護・舟志・仁田・三根・奴加岳・貝口・久根・内院) オケル(加志)

② 起きた $\parallel$ オキタ(大部分) オケタ(オケル地域の他、佐須奈・佐護・伊奈・西津屋・三根・貝口)

③ 落ちる $\parallel$ オチル(多い) オツル(琴・仁田・三根・小船越・貝口・曲・阿連・久根・上槻・内院・豆酸)

オテル(唐舟志・佐護・琴・小船越・貝口・小浦・久和・久根・上槻・内院・瀬)

④ 落ちた $\parallel$ オチタ(多い) オテタ(オテル地域の他、比田勝・佐須奈・湊・舟志・仁田・伊奈・加志・阿連)

⑤ 出した $\parallel$ ダシタ(多い) ダイタ(鰐浦・豊・葦見・琴・舟志・伊奈・志多留・鹿見・貝口・唐州・小船越・久根・上槻・安神・豆酸—cf. この形は老人に多い。各地でデータの如き音変化形をとる)

⑥ 読んだ $\parallel$ ヨンダ(多い) ヨーダ(仁田・奴加岳・廻・貝口・久根・上槻・安神・豆酸)

⑦ 来られる〔尊敬〕 $\parallel$ コラル〔ル〕(豊・佐須奈・佐護・舟志・伊奈・仁田・鹿見・加志・三根・佐賀・曲・内山・瀬・豆酸—コはケ・キ等となる地域もある) コラシヤル(三根・志多賀・櫛・佐賀・豆酸) キナハル(佐賀・小

綱・厳原・小茂田)

⑧ 読まなかつた $\parallel$ ヨマ〔ン〕ジャツタ(多い) ザツタ(佐護・佐須奈・阿連・内山・豆酸) シヤツタ(志多

留・船越・厳原)

⑨ 読むけれども $\parallel$ ヨムケン〔orツ〕ドン(仁位・水崎・大船越・雞知・竹敷・小浦・厳原・阿連・久田・浅瀬)

パツテ(佐須奈・佐護・狩尾・伊奈・志多留・久和・久根・上槻・安神・瀬・豆酸)—cf. その他、島の多くの地域で

は、ケン〔orツ〕ドン〔若い人〕とバツテン〔年配の人〕の両型が並存している。

⑩ 読むから〔順接〕ヨムケン〔orケー〕（大部分） ヨムテ〔orデ〕（豆酸）

⑪ 本を〔目的格〕ホンラバ（大部分） ホンバ（比田勝） ホンノ（久和・内院）

⑫ 東風ヨコチ（大部分） コチカゼ（鰐浦・豆酸） マコチ（久和）

⑬ 南東風ヨシヤナ（佐護・比田勝・阿連・豆酸など周辺部に多い） ハエコチ（伊奈・雞知・竹敷・小浦）—cf.

蔵原など中央部では、特別の語形をもたない所が多い。

⑭ 北西風アナジ（大部分） キタニシ（舟志）

⑮ 昨夜ヨンベ（多い） ヨーベ（唐舟志・内山・内院・瀬） キノンバン（竹敷・浅藻）—cf. 多くの地域では、キ

ノンバンが一昨夜を意味する）

⑯ 明々後日シアサツテ（大部分） シエーテ（久根田舎）—cf. 内院では、セーテが、一昨々日を意味する

⑰ 夕方ヨサリ（多い。周辺部各地では語末母音が弱化する） ヨーベ（仁位） マグレ（佐護・雞知） オテマグレ

（舟志・内院）

⑱ 終日ヒガナ（orラ）イチニチ（多い） ヒガナジュー（阿連） ヒガナホドキ（内院） ヒシテジュー（比田

勝・舟志・久和・内院）

⑲ 隔日にヒシテアイオキ（多い。アイはエーとなる地域が多い） ヒシテオキ（比田勝・舟志・内院・豆酸） ヒ

シテビシテ（鰐浦・佐須奈・仁位・小茂田） ヒシテゴシ（比田勝） ヒシテガーシー（佐護・今里）

⑳ 蔽イヤボ（多い） ヤブゾー（豊・佐須奈・琴） ヤブ（蔵原・浅藻）

㉑ 崖オテギシ（大部分） キツテオトシ（多い。オテギシよりも急な斜面を意味するのか） オービラ（阿連）

ギシ（久根）

対馬方言の性格

対馬方言の性格

- ② 田Ⅱタ(多い) タバル(佐須奈・琴・仁田・仁位・小茂田)
 ③ 畑Ⅱハタケ(多い) ヤマ(比田勝・小船越・雞知・竹敷・久和) タニ(小茂田) — cf. 『日本言語地図』188図
 では、対馬すべてハタケ形になっている。

- ④ 砂Ⅱスナ(多い) ズナ(比田勝・佐護・小浦・久和〔古〕・内院〔古〕・瀬・豆酸)
 ⑤ 牝牛Ⅱオナメ(大部分) ウナメ(比田勝・伊奈・鹿見・志多留・廻)
 ⑥ 子牛Ⅱメノコ(大部分) ベベノコ(佐須奈)
 ⑦ 牡馬Ⅱコマ(多い) コマウマ(佐須奈・仁位・久根) オトコウマ(雞知・竹敷・厳原)
 ⑧ 牝馬Ⅱゾーヤク(多い) ダンマ(鰐浦・佐護・鹿見〔古〕・竹敷・雞知・今里〔新〕・内院) コバン(雞知。
 或は牡馬の誤りか)

- ⑨ 鼻Ⅱネコドリ(多い。豆酸・久根など各地で、語末母音弱化) ネコブツロー(阿連) シモヨビ(津和原・佐須奈・佐護・舟志・琴・葦見・伊奈・鹿見・三根・小船越〔古〕) シミー(琴・三根) ユーメ(仁田) コーキチ(浅藻)
 ⑩ みそさざいⅡカンチュツチュー(小浦) カンチュー(比田勝・佐須奈) カンチュツチュクサンゼー(佐護)
 カンチュクチュク(久和) カンスズメ(久和・内院) クソカツチヨ(雞知)

- ⑪ 魚Ⅱサカナ(多い) イオ(多い) ヨー(佐須奈・久根) ユー(曲・内院) — cf. 豆酸・久和・久根・内院など若干の地域では、魚を一般にイオと言うが、多くの地域では、サカナ・イオが並存しており、その関係は複雑である。例えば、「大きい魚をイオと言うが、小さい魚でもたくさん集っている時はイオと言う」「タイノイオ・クロイオなど特定の魚をイオと言う」等々、その説明もまちまちであった。『日本言語地図』216図では、「対馬方言のイオ・ウオ形はいずれも、標準語意識を伴う」とされているが、イオは生粋の方言形と見なされる。

- ⑫ 石亀Ⅱコーズ(多い) コージ(佐護・吉田・木坂) コーゾ(琴) コンドロ(鹿見・志多留・仁田) コ

ンバジヨ一(津柳) ドンガメ(舟志・小船越) イシガメ(豆酸)

③③ 海老〔小さいもの〕Ⅱエンビ(多い) エツピ(吉田・木坂) オトジヨ一(内院) —cf. 大きい海老は大いエ
ビカネという。

③④ 蟹Ⅱカニ(多い) ガン(比田勝・佐須奈・佐護・小浦・曲・今里・阿連・久田・久和・内院・豆酸) ガニ
〔orネ〕(比田勝・雞知・小浦) ツガン(仁位・阿連・小茂田・久根) ツガニ〔orネ〕(今里・阿連) ガツソ一
(久根・久和)

③⑤ 蛇Ⅱナガムシ(大部分) ナガタロー(佐須奈・久和)

③⑥ 蝮〔及びそれに準ずる毒蛇〕Ⅱヒラクチ(大部分) —cf. ヒビラクチ(伊奈・鹿見・櫛)とか、チャビラクチ(唐舟志・津和
原)などの各種もあるらしい。ヒバカリ(周辺部各地に多い。「ヒバカリはヒラクチより小さいが猛毒」という様な説明があつた)

③⑦ 無毒の赤い蛇Ⅱアキュリヨ一(比田勝・唐舟志・津和原・佐護・琴・伊奈・鹿見・三根・水崎) アクリヨ一
(志多留)

③⑧ とかげⅡトカゲ(中央部に多い) トカギリ(舟志・佐須奈・佐護・今里・阿連・内院) トーゲ(豆酸)

③⑨ 蛙Ⅱヒキ(多い) ビキ(比田勝・鹿見・廻・唐州・今里・阿連・小茂田・上槻・久根・久田・久和・安神
・内院) ビキジヨ一(佐須奈・舟志・仁田・三根) ヒキチ(大船越) ワクドービキ(今里)

④⑩ お玉杓子Ⅱゲール(多い) ゲリ(琴)

④⑪ 蝸牛Ⅱデンデンムシ(大部分) デーロ(内山) ゴーナ(久根・豆酸) ヤドカリ(上槻)

④⑫ 蝶Ⅱチヨ一チヨ(多い) チューチュ(佐須奈・舟志・今里・阿連・小茂田・久根・豆酸)

④⑬ 毛虫Ⅱヒゲムシ(多い) オコゼ(津和原・佐護・琴)

④⑭ 蜻蛉Ⅱエンバ(大部分) エンバイ(豆酸) トンボ(比田勝・水崎・雞知・久和・浅藻)

対馬方言の性格

対馬方言の性格

- ④⑤ 蟪蛄 〓 オガマナトーサン (多い) オガメ (久和・久根・豆酸) オガム (厳原・阿連) オガンボ (雞知)
シラメハギ (佐須奈・仁位・今里) ソーバツクリ (仁位)
- ④⑥ 飛蝗 [蝗と混同している場合もあり得る] 〓 チョンマ (舟志・仁田・加志・三根・雞知・今里・阿連・小茂田)
キョンマ (仁位・貝口・小船越・阿連・久田・豆酸瀬) ゴンマ (豆酸) トビムシ (内山) トンムシ (鰐浦・琴・内院) トベトベ (久和) トンボ (琴・伊奈・内院) ハタンマ (小茂田) キチキチ (久根) キチハタ (上槻)
キチキチダカ (瀬・豆酸) ギース (浅藻)
- ④⑦ 蜘蛛 (大きいもの) 〓 ジョーラ (多い) ジョーロ (琴・三根・廻・久根・瀬・豆酸) ジョール (久根田舎)
ゾーラ (三根) キンコブ (小船越・内院) チョーセンコブ (比田勝・久和)
- ④⑧ 蟻 〓 アリムシ (多い。鰐浦・佐須奈・貝口・久根・上槻などでは第二拍母音弱化。阿連・豆酸では第二拍が i 音になる)
アリゾー (三根) アットー (豆酸) アリ (浅藻)
- ④⑨ 尾 〓 シリホ (多い) シリョー (豆酸)
- ⑤⑩ 松毬 〓 マ (ツ) ツングリ (多い。周辺部各地では語末母音弱化) ツングリ (津和原・佐護・仁位・小船越・雞知・小浦・浅藻) フングリ (佐須奈) — cf. 『日本言語地図』247図では、佐須奈もマツングリ形である。
- ⑤⑪ 桑実 〓 クワンミ (多い) クワイチゴ (三根・佐賀・加志・廻・内院) クワンナル (阿連) ナリ (舟志)
ズミ (貝口・水崎・洲藻) ジュミ (櫛) クッズン (久根・上槻) バズン (津和原・伊奈) バジュン (豆酸)
パンズ (佐護)
- ⑤⑫ 落苔 〓 カンドー (かなり多い。今里・内院・瀬・豆酸など各地では、第一拍がクワ (kwa) 音になる) カンゾー (舟志)
フキナ (久和) フキントー (豆酸)
- ⑤⑬ 土筆 〓 ツクシ (多い) ツクツクボーシ (比田勝) ツクシンボ (佐護・仁位) マツパントー (今里) マ

ツナントー(仁位) マツバグサ(雑知・小茂田)

⑤4 玉蜀黍||トーキビ(大部分) キビ(仁田・厳原)

⑤5 きのこ||ナバ(大部分。cf. 比田勝・佐護・舟志などでは、ナバが椎茸を意味する)

⑤6 南瓜||ボーブラ(大部分。久根・上槻などでは第三拍母音が弱化して促音となる) ポンブラ(比田勝・佐須奈・佐

護・湊・伊奈・仁田・三根)

⑤7 甘藷||コココ「イ」モ(大部分) コイコイモ(雑知) トーイモ(瀬・豆酸) ゲンキイモ(内山) イモ

(小茂田・浅藻)

⑤8 虎杖||ズイコ(多い) ズイコン(阿連・小茂田) ジーコ(鰐浦・久和・豆酸) ズイノコ(竹敷) ズイ

(久根) シーシバ(佐賀) タドリ(佐須奈・内院) ポンボン(比田勝・佐須奈・佐護・舟志)

⑤9 曼珠沙華||ヒガンバナ(多い) ソーレンバナ(小浦・今里・阿連・内院) シレーバナ(久根) テクサレ

バナ(雑知) テハレグサ(久和・内院)

⑥0 鳳仙花||トーパーナ(大部分) ホーセンカ(久根・豆酸)

⑥1 葛根||カンネ(多い。今里などは第一拍が ^{ka}wa となる) カズラネ(佐護) カンランネ(久根田舎) カンネカ

ズラ(内院) カズマキ(久和) イチロー(佐須奈)

⑥2 父||トト(大部分) —cf. 丁寧語形としては、トトサマ・トトヤン・(オ)トツツアン等があるが、それらの間には、地

域差の他、位相差も複雑にからみ合う。例えば、トトサマとトトヤンの関係を見ても、久田では後者が百姓の言葉(前者は士族の言葉)であり、久和では、後者が老人語であるらしい。また、豆酸では、オトツツアンが士族の言葉であるという。

⑥3 母||カカ(多い) タタ(多い、前者に比し上品) —cf. カカとタタの関係は、地域差よりもむしろ、位相差が著し

い。また、丁寧語形としては、それぞれに、サマ・ヤンなどを付するが、その関係は概ね、前記「父」の場合に準ずる。

対馬方言の性格

⑥4 兄Ⅱバボー(大部分) バブー(安神・久根) バーボ(上槻) — cf. 丁寧語形としては、アンサマ・アンヤン・アイヤンなどの形が多い。豆酸・今里などではバボーサマの形もあるというが、これは余り広くないらしい。

⑥5 弟Ⅱオトツチョー(多い) オトジョー(今里・内院)

⑥6 玄孫Ⅱヤシワマゴ(多い) ヤシヤマゴ(琴・廻) ヤシマゴ(津和原・仁位・雞知・豆酸) ヤスマゴ(鹿

見・阿連) ヤシバマゴ(今里) カシワマゴ(久根) ツルマゴ(鰐浦・佐須奈) — cf. ツルマゴを「玄孫の子」と説明する人もあるが、「玄孫」の意に用いる人もかなり存する。

⑥7 親戚Ⅱシンルイ(多い) シンシエキ(仁位・小浦・阿連・久和) イトコ(比田勝・佐護・舟志・雞知・今里・阿連・豆酸) ミウチ(内院)

⑥8 欲ばり「吝嗇者」Ⅱガンドー「モン」(多い) ヨッガンドー(小浦・今里) ヨクドーガン(仁位) ヨクド

ーラン(竹敷) ヨクドース(久和) ヨクズラ(瀬・豆酸) ヨコズナ(小茂田) ヨクゼー(瀬「新」) ニギ

リ(今里・内院「新」) ニビ(今里) イシクジリ(今里)

⑥9 金持Ⅱオヤカタ(多い) ヤンバン(比田勝・佐護・久和)

⑦0 乞食Ⅱホイト(多い。— cf. 久田・久根・内院・瀬・豆酸などでは、ホイトがけんか言葉として用いられ、また、貝口・安神・久根・上槻などではお供物の意に用いられる) ゼンモン(鰐浦・豊) ヌスツト(久根・瀬)

⑦1 私生児Ⅱテテナシゴ(多い) ノゴ(佐護・舟志・阿連・久和) ヨペーゴ(佐護・久和・内院) ヒリゴ

(佐護) カゲゴ(豆酸)

⑦2 額Ⅱシテグチ(多い) ヒテグチ(比田勝・仁位・小浦・久田) デビテー(久根)

⑦3 旋毛Ⅱギリギリ(大部分) ツジ(佐須奈・仁田・小茂田・豆酸)

⑦④ 唇Ⅱクツツバ (多い) クチバ (仁位・久田) クチバタ (大船越) クチビラ (琴) ツバ (舟志・仁位) — cf. 『日本語地図』116図では、ツバ・クチバ・クチバタ等がなく、クツツバとクチビル (下県地域) の両形が示される。クチビルは共通語の用法と見るべきか。

⑦⑤ 顎Ⅱアゴ (多い) アギ (仁位・小茂田・久根)、アグ (雞知・豆酸) アギタ (鰯浦・佐須奈・佐護・大船越・久和・内院・豆酸) アグタ (比田勝・琴・舟志・仁田) — cf. アゴとアギタ (or アグタ) 両形の並存地域では、後者が下品な感じであるらしい。

⑦⑥ 顔Ⅱツラ (大部分) カバチ (久根) ガンツキ (比田勝) カバ (阿連) — cf. 『日本語地図』106図では、カバチ・ガンツキなどがなく、ツラ・カオの両形が示されている。カオは共通語の用法と見るべきか。

⑦⑦ 眉毛Ⅱマイゲ (大部分。メーゲの如き形をとる事が多い) マヒゲ (仁位・雞知)

⑦⑧ 咽喉Ⅱノドンス (大部分) ノード (豆酸) ノドブエ (仁位・今里・小茂田)

⑦⑨ 臂Ⅱヒンシリ (多い) ヒンジリ (貝口・小船越) ヒンシ (吉田) ヒジシリ (豆酸) ヒジデ (久根) ヒンギシ (狩尾・木坂・津柳)

⑧① すねⅡコーゲーズネ (多い) ムコーズネ (比田勝・雞知・久和) エダ (雞知・久根・豆酸) エダブシ (久根)

⑧② 臂Ⅱシツタブラ (大部分) ケツタブラ (今里・阿連・小浦・久和・久根・内院) シリベタ (仁位)

⑧③ 病氣Ⅱヤンメー (大部分) — cf. 佐護・久和・豆酸などでは、ヤンメー (or ヤマイ) が伝染病のみを意味する。また、多くの地方で、ヤンメ (尾高型、眼病の意) とヤンメ (頭高型、病氣の意) とが、アクセントで区別される。

⑧④ 啞Ⅱユーシ (大部分) ウグシ (浅藻) アッパン (佐須・小茂田) ツンボ (小浦・久和・内院)

⑧⑤ 袖無しⅡチャンチャンコ (多い) カタスケ (比田勝・佐護・舟志)

⑧⑥ 筒袖 [or それに準ずる仕事着] Ⅱツツポ [ツデ] (多い) テツポソデ (葦見・安神・内院・豆酸) スツポソデ (豆

対馬方言の性格

対馬方言の性格

- 酸) テクリ (安神) テクツ (久根) チクリ (佐護) トージン (瀬・豆酸) トンジン (内院) ハギトージン (継
ぎはぎの仕事着) (久根・上槻・内山・瀬・豆酸) テッポトージン (内山) ハンチャ (貝口・内山・久根・瀬・豆酸)
- ⑧⑥ 禪Ⅱヘコ (大部分) マワシ (今里) フンドシ (仁位)
- ⑧⑦ 襠褌Ⅱシメシ (大部分) シタシ (小船越・久根・上槻・瀬・豆酸)
- ⑧⑧ 刺身Ⅱナマミ (多い) ナマイオ (久根・豆酸) ブエン (津和原・琴・貝口・小船越・久根・上槻・安神)
- セギリ (比田勝・舟志・貝口・久和・内院) スギリ (内山〔古〕・内院) サシミ (小茂田・浅藻)
- ⑧⑨ 土間Ⅱドージ (大部分) ドージョー (佐須奈)
- ⑨⑩ 台所Ⅱナガシ (多い) ダシ (比田勝・佐護) タナモト (舟志・久和・内院)
- ⑨⑪ 末座〔囲炉裏を囲んで坐る場所〕Ⅱキジリ (多い) シビチラ (久根浜) シビッデー (安神)
- ⑨⑫ 井戸Ⅱイド (多い) ツツミ (久根・上槻・内院・豆酸―概ね、語末母音の弱化が著しい) チチン (久和〔古〕
・安神〔古〕・内院) ツ〔orチ〕チー (舟志・阿連・小茂田・久根) カワ (小船越・小茂田―cf. 『日本言語地図』197図
ツボカワ・イガワ等と言う事がある。これに対し、川をナガラガワと言う) カマ (大船越・豆酸)―cf. 『日本言語地図』197図
では、豆酸のツチー形以外、すべてイド形として示される。
- ⑨③ 松葉Ⅱタテクサ (多い) シバ (佐須奈・伊奈・加志) オテバ (安神) マツバ (豆酸) コノハ (瀬
エベラ (琴) イボラ (小船越)
- ⑨④ 組板Ⅱマナイタ (多い) キリバン (津和原・佐護・伊奈・鹿見・廻・仁位・小船越・雞知・内院)―cf. 『日
本言語地図』164図ではすべてマナイタ形。
- ⑨⑤ すりこ木Ⅱスリコギ (大部分。第二拍は促音化する地域が多い) レンギ (久根・上槻)―cf. 『日本言語地図』163図で
はすべてスリ〔orツ〕コギ形。

⑨6 櫃Ⅱメシツギ(多い。南部では語末母音弱化傾向) ハンボン(豆酸) ハンブン(瀬〔老人〕) イビツ(安神

・久根) コバチ(津和原・唐舟志・琴) オヒツ(浅藻)

⑨7 箆Ⅱショーケ(大部分Ⅰ豆酸では、目の細かいものをショーケと言ひ、目の粗いものをザルと言ひ) タカゲ(舟志)。

小さいものを言ひ)

⑨8 五徳Ⅱカノー(多い) カナワ(佐護・仁位) | cf. 大きいものをカノー〔orカノーサマ〕と言ひ、小さいものをゴトクと言ひ地点が多い。

⑨9 十能Ⅱヒカキ(大部分) オツカキ(大部分) ジューノー(比田勝・佐護) | cf. 多くの地域で、ヒカキ・オツカキ両形が並存しているが、一おう、後者を古しとする様である。

⑩0 箆Ⅱスカリ(多い。周辺部では語末母音の弱化傾向あり) テボ(多い) スカルテボ(佐須奈) カケテボ(佐護・琴・貝口・久和・瀬) カレーテボ(久田) | cf. スカリは大きい箆を指すとか、背負い箆を指すとかいう説明があった。右記それぞれに、形や用途の差があるのかもしれない。

⑩1 桶Ⅱタゴ(大部分Ⅰ大きいものはコガと言つて、タゴと区別される地域もある) ヒョーゴ(久和)

⑩2 束子Ⅱソーラ(多い) ショーラ(大浦) ササラ(豆酸)

⑩3 木槌Ⅱカケヤ(多い) サイコンズチ(久和・内院・浅藻) サイズチ(内院) サシズツ(瀬・豆酸) サズ(佐護・仁位・今里) サッス(佐須奈) ヨコズチ(比田勝) モクズチ(久和) ドンズ(阿連)

⑩4 鍬Ⅱクワ(大部分。周辺部では、しばしば *kwa* の如く発音される) パ(久和・内院・瀬)

⑩5 案山子Ⅱオドシ(多い) トルオドシ(琴) カガシ(久根・上槻・安神・瀬・浅藻・豆酸) カボン(内山・内院・豆酸)

⑩6 お手玉Ⅱオジャミ(多い) タマ(津和原・佐須奈・佐護・舟志・伊奈・櫛・仁位・曲・小茂田・久根・上槻

対馬方言の性格

対馬方言の性格

・内山・内院・瀬 フセ〔ダマ〕（琴・仁田・鹿見・三根・豆酸）―cf. 『日本言語地図』145図では、厳原にオテダマ形が示されているが、共通語的用法であろうか。

(107) 隠鬼Ⅱカクレオニ（多い） ゴジューカクレ（佐須奈・三根） ゴジューカゴミ（佐護・舟志・加志） カゴミ（佐護）

(108) 鬼ごっこⅡセメセメ（比田勝・豊・佐護・佐須奈） セメゴト（佐須奈） ツカマエゴト（櫛） ツカマエオニ（伊奈・三根）

(109) 胡坐Ⅱテッチョ（多い） デッチョ（久和） ケッチョ（琴・貝口） ゲンガタ（久和・内山・内院・瀬・豆酸） ゲンザ（琴） ドンザ（竹敷） オトコイドリ（佐護・小船越・久根・上槻・内山・安神・瀬） オトコセイ（上槻） ハチカル（小綱。動詞形としての用法）

(110) 私Ⅱオレ（大部分）。語末母音は弱化消滅する地域が多い―オッド・オイド・オンド・ンド等の語形は、オレドモの如き複数形に出自するらしいが、私の意味に用いる地域も多い様である。一般的に、オッドン・オイドン・ンダチ等の場合は、複数的表現に用いるという説明が多かったが、オッド・オイド・オンド等に関する説明は、まちまちであった。オンドは女性に多く、オッドは男性に多いという様な位相差も認められる。 ワシ（内山・浅藻など各地で用いる）

(111) あなたⅡンナ（大部分） オシ（大部分） ワレ（周辺部各地）―cf. これらの地域差は難しいが、オシが最もおとなしい感じによく用いられる。ワレは待遇度の低い表現で、厳原など中央部には多くない様である。オドレは更に待遇度が低く、或種のけんか口調である。ンナは、オシとワレとの中間的性格の語と言えようか。下県より上県にやや多い様である。

(112) 驚くⅡタマガル（大部分） タマゲル（久根〔古〕） ビックリスル（仁位）

(113) 叱るⅡガル（大部分） オゴル（今里・内院）

(114) 歩くⅡアユム（大部分） アルク（多い。アユムより新しい） カチカライク（多い。歩いて行く意）

(115) 走るⅡハシル(多い) トブ(多い) オロタエル(久根・豆酸)

(116) からかうⅡセカス(多い) セブラカス(久和) セレバカス(今里・阿連) アヤス(佐護・仁位・今里)

エラカス(比田勝・佐護・久和)

(117) 叩くⅡシワク(多い) シバク(浅藻)

(118) 投げるⅡホタル(大部分) ホツツケル(比田勝) — cf. ナゲル・ナグルの形もかなり存するが、豆酸などでは、ホタルより、ナゲルの方が、遠くへ投げる感じであるらしい。

(119) 与えるⅡクルル(大部分。下一段式のクレル形をとる所も多い) — cf. 共通語のヤルに対応するクル(orレ)ル形は、行クに対するクル形の場合に似ている。

(120) 腐るⅡヨワル(多い) ネマル(比田勝・佐護・舟志・阿連・久和・久根・内院) — cf. 飯などはネマルと言い、魚などはヨワルと言う様な地域が多い。

(121) 落ちる(木実など)Ⅱアエル(大部分。豆酸など、下一段式のアウル形を用いる所もある)

(122) 潜るⅡカツグ(大部分) カセグ(奴加岳・小浦・曲) コンブル(浅藻) ツカル(浅藻)

(123) まじめなⅡマツスギー(多い) マツター(多い) カター(佐護)

(124) きれいなⅡリツバナ(大部分) テーター(久和)

(125) 小さいⅡコメー(大部分) チョツコメー(多い)

(126) 未熟な「果物など」Ⅱナマシー(大部分) ウンドラン(比田勝・佐護)

(127) だるいⅡダリー(多い。ダルイ・ヒダルイ等の形をとる所もある) ダラシー(仁位・今里・阿連) ヒムシー(久根)

(128) たくさんⅡギョーニ(大部分。—比田勝・佐護・舟志・内院などではギョーシンの形をとる)

(129) さようなら「別辞」Ⅱザトーヤ(多い) ザトーナ(小船越「古」・小浦・久和) オイザットナーシヤレマセ

対馬方言の性格

(舟志)

(注) 本稿の場合、方言語彙―特に意義素的語形式の配列は概ね、東条操氏『簡約方言手帖』(郷土研支社、昭6)のそれに従った。私の調査が大体それによった為である。項目の配列順のみを示すと次の如くである。

支体 (四)衣食住 (四)人事年中行事 (四)雑 (七)名詞以外の諸詞。

なお、音韻(アクセント)や形態素的現象―用言の活用や付属語の用法などは、一おう、意義素的語形式の前に配列した。

二― 地域差に関する問題点

勿論、島一般を通じて概ね共通な方言形もかなり存する。例えば、左記(イ)項諸例の如き方言形は概ね、島全体を通じて認められる様である。

ただ、ここで注意すべきは、『無い』という発言が非常に難しいという事。以下の場合も、所詮、筆者の調査の結果として、それら以外の方言形が認められなかったというにすぎない。実際問題としては、調査の不完全さという様な面があり得るのかもしれない。現に、左記(四)の如き場合、『日本言語地図』では、島全体が一つの方言形で示されているのに対し、筆者の調査ではかなりの地域差が認められたという次第である。

更に、左記(イ)の場合においても、これらの方言形に対立する共通語形が、各地で認められる事言をまつまい。左記(イ)の諸例においても、『日本言語地図』その他を考慮しつつ、共通語形との関係など、そのユレを適宜注記した。

また、前述浅藻・水崎などのいわゆる開拓者寄留者部落では、しばしば左記以外の方言―すなわち非対馬的方言形が認められる様である。

(イ) 概ね島一般に認められる方言形

- ①書くゴタル(ようだ) ②書いッロー(だろう) ③山ジャ(指定辞) ④高うシテ(高くて) ⑤ナシテ(な

ぜ) ⑥書くタツチャ(書いても) ⑦皮ゴシ食う(皮ごと) ⑧百円シコ(百円ばかり) ⑨百円ハカ(百円しか)

⑩柿テロン(並列助詞) ⑪敵原サメ(敵原へ。サネ・サニ・サンの如き形をとる事もある) ⑫ニシ(西風) ⑬ハエ

(南風。ヘーの如き発音が多い) ⑭コツター(牡牛) ⑮コブ(小さい蜘蛛。『日本言語地図』233図では、各地にクモ形

が示されているが、共通語的用法と見るべきか) ⑯トীগギ(無花果) ⑰ネネ(姉。丁寧語形としてはネネサマ・ネネヤ

ンなど。その他、アネの形も若干得られたが共通語的用法かもしれない) ⑱ゴター(腕。「肩から手首の間をゴター」と言い、手

首をウデと「言う」の如き説明をする人もあったが、ゴターとウデとの間に、或程度の地域差があるのかもしれない) ⑲キツカケ

(家の庇) ⑳セツチン(便所) ㉑ヨキ(斧。周辺部ではしばしば語末母音が弱化) ㉒オラブ(呼ぶ) ㉓オドロク

(目覚める) ㉔イドル(坐る) ㉕ヨセル(集める。周辺部ではヨスル形もある) ㉖カラウ(背負う。周辺部ではカ

ロー形も) ㉗バル(掘る) ㉘エーラシー(可愛い) ㉙ヌキー(暖い。所によりスタイ形も) ㉚ヒエー(寒い。所

によりシエー・ヒヤイなども) ㉛フター(太い。所によりフトイ形もある。なお、『日本言語地図』17図では、佐須奈・仁位・

敵原にオオキイ(orナ)形が示されているが、共通語的用法かと思われる) ㉜サエン(不味い)

(四)『日本言語地図』では、島内概ね同一方言形として示されるが、実際問題として、或程度の地域差が認められ
るものの一例

① 畑Ⅱ第188図ではすべてハタケ形―実際は、ヤマ(各地)・タニ(小茂田)などの形もある。

② 魚Ⅱ第216図では、標準語的なウオ形以外概ねサカナ形―実際は、イオ・ユーなどの形がかなり多く認められる。

③ 蛇Ⅱ第226図ではすべてナガムシ形―実際は、ナガタロー(佐須奈・久和)の如き形もあり、その他、種類によ
っていろんな語形が認められる。

④ 蝮Ⅱ第228図ではすべてヒラクチ形―実際は、各地でヒビラクチ・チャビラクチなどの形もあり、また、ヒバカ

対馬方言の性格

りを蝦の意味に用いる所もある。

⑤ 蜻蛉Ⅱ第231図ではすべてエンバ形—實際は、エンバイ(豆酸)形もあり、また、各地で認められるトンボ形も、そのすべてが共通語的用法であるとは限らない。

⑥ 松毬Ⅱ第247図ではすべて「マ」ツングリ形—實際はフングリ(佐須奈)などの形もある。

⑦ 唇Ⅱ第116図では、共通語的なクチビル形を除きすべてクツツバ形—實際は、クチバ(仁位・久田)、クチバタ(大船越)、クチビラ(琴)、ツバ(舟志・仁位)などの形もある。

⑧ 顔Ⅱ第106図では、共通語的なカオ形以外すべてツラ形—實際は、カバチ(久根)、カバ(阿連)、ガンツキ(比田勝)などの形もある。

⑨ 井戸Ⅱ第197図では、豆酸のツチー形以外すべてイド形—實際は、下県各地にツツミ・ツチー・ツチン・カワ・カマ等の形が多い。

⑩ 組板Ⅱ第164図ではすべてマナイタ形—實際は、周辺部にキリバン形がかなり存する。

⑪ すりこ木Ⅱ第163図ではすべてスリ「orツ」コギ形—實際は、下県にレンギ形がかなり存する。

三 対馬方言の特異性

全国的に見た場合、対馬方言の性格は如何に。

先ず、「全国的に見て、対馬方言は珍しい現象が少い」(『人文』1号65頁)かどうかであるが、これは甚だ難問題である。第一、《珍しい》ということの意味自体があいまいなのである。

その辺今後にまつ所が多いわけであるが、ごく概括的に見ても、対馬方言には、下記①の如く、他地域に余り例のないものが相当認められる。尤も、下記の如きも所詮、『日本言語地図』『全国方言辞典』『分類方言辞典』をはじめ諸方言書において、比較的稀であるという事。実際問題としては、必ずしも珍しくない現象が含まれているかもしれないわけである。

① 敵原など対馬大部分のアクセント―例えば、二拍名詞のアクセント体系は次の如くであるが、これは一寸珍らしそうである。

一・二・四・五類	三類
● ○ ▼	} ○● ●○ ▼▼ (花・犬・足) (山)

(注) 本稿のアクセント表記において、●は高い音を示し、○は低い音を示す。▼や▽は、ガ・ヲ・ニなどの格助詞を示す。

敵原アクセントにおける一・二・四・五類対三類という対立自体は、平山輝男氏(『九州方言音調の研究』)や金田一春彦氏(『人文』1号78頁)の説かれる如く、杵岐西北部方言の場合と一致するが、アクセント型の姿はかなり異っている。杵岐西北部では、三類がすべて○●▼型となり、敵原アクセントの如く、第二拍の母音によって型がユレるという様な事はない。

② 語中尾リ・ル(時にはレも)の音⇨豆酸・阿連では、アイ(蟻)・コイ(これ)の如く、イ(i)音に発音される傾向が著しい―cf. 鹿児島県や肥前の一部、山形県・新潟県の一部、宮古島の一部などでもリ・ルがイになる傾向があると言われるが、それぞれ、豆酸方言の場合とは、多少とも事情を異にする様である。

③ 夕方⇨オテマグレ(舟志・内院)―cf. マグレは他でもかなり存する。同⇨ヨーベ(仁位)―cf. 昨夜の意のヨーベは、対馬以外でもよく用いられるが、夕方の意には余り使用されないのか。

対馬方言の性格

対馬方言の性格

- ④ 終日||ヒガナホドキ(内院) — cf. ヒガナヒジュー・ヒガナヒシチなどの形は九州各地にある。
- ⑤ 隔日||ヒシテビシテ(鰐浦・佐須奈・仁位・小茂田) — cf. ヒシテゴシ・ヒシテガイなどの形は、対馬以外にもある。
- ⑥ 十一月||シモツキ(多い) — cf. 各地で使われるのかもしれないが、余り報告されていない。
- ⑦ 十二月||シワス(多い) — cf. 同右
- ⑧ 崖||オービラ(阿連) — cf. ヒラ・ヒラコの如き形は各地にある。
- ⑨ 藪||ヤブゾー(豊・佐須奈・佐護)
- ⑩ 牝馬||コバン(雞知) — cf. 牡馬の誤りか。牡馬の意のコマウマは各地にある。
- ⑪ 梟||シモヨビ(上県に多い) 同||シミー(琴・三根) 同||ユーマ(仁田)
- ⑫ せきれい||イワシカキ(小茂田) — cf. イワタタキは関東地方にもある。 同||イソカッチョー(仁田) — cf. 百舌鳥の意のカッチューは北九州などにもある。
- ⑬ みそさざい||カンチユツチユクサンゼー(佐護) 同||カンチュー(比田勝・佐須奈) 同||クソカッチョー(雞知)
- ⑭ 雞冠||カムロ(豆酸) 同||カモリ(琴・雞知) — cf. カンムリは大分県などにある。
- ⑮ 石亀||コンドロ(鹿見・仁田・志多留) 同||コンバジョー(津柳)
- ⑯ 海老||小||オトジョー(内院) 同||エツピ(吉田・木坂)
- ⑰ 蛙||ヒキチ(大船越) — cf. ヒキヤビキチョーなどの形は各地にある。
- ⑱ 蛇(無毒の赤いもの) ||アキュリョー(上県各地) 同||アクリョー(志多留)
- ⑲ 蜥蜴||トーゲ(豆酸)

②⑩ 蝸牛Ⅱヤドカリ（上槻） 同Ⅱゴーナ（久根・豆酸）―cf. 普通はやどかりを指す。

②⑪ 毛虫Ⅱオコゼ（津和原・佐護・琴）

②⑫ 蟪蛄Ⅱソーバツクリ（仁位） 同Ⅱカミナリドン（琴） 同Ⅱシラメハギ（佐須奈・仁位・今里）―cf.

シラメドリは伊豆大島など。

②⑬ 飛蝗Ⅱチョンマ（名地） 同Ⅱキョンマ（下県各地） 同Ⅱゴンマ（豆酸） 同Ⅱトベトベ（久和）―cf. トンブシその他の形は岐阜県など各地にある 同Ⅱキチハタ（上槻） 同Ⅱキチキチ（久根） 同Ⅱキチキチ

ダカ（瀬・豆酸）―cf. キチンボ・ギツチョなどの形は栃木県その他各地にある。

②⑭ 蜘蛛（大）Ⅱゾーラ（三根） 同Ⅱジョール（久根）―cf. ジョーロは土佐などにある 同Ⅱチョーセンコブ

（比田勝・久和）

②⑮ 蟻Ⅱアリゾー（三根） 同Ⅱアットー（豆酸）

②⑯ 桑実Ⅱナリ（舟志）―cf. 果物の意のナリは鬼界島など各地にある 同Ⅱクワンナリ（阿連） 同Ⅱバズン

（津和原・伊奈） 同Ⅱバジユン（豆酸） 同Ⅱパンズ（佐護）―cf. クワズミの形は信州等各地にある。

②⑰ 路苔Ⅱフキナ（久和）―cf. フキノメなどの形は、千葉県その他にある。

②⑱ 土筆Ⅱマツバントー（今里） 同Ⅱマツナントー（仁位）―cf. マツノトー形は熊本県などにある。

②⑲ 甘藷Ⅱコーコ（イ）モ（大部分） 同Ⅱコイコイモ（雞知）

③⑩ 葛根Ⅱイチロー（佐須奈） 同Ⅱカズマキ（久和）―cf. 熊本県各地などでは葛をカズという。

③⑪ 虎杖Ⅱシーシバ（佐賀）―cf. イヌシバは山口県などにある。

③⑫ 鳳仙花Ⅱトーバナ（大部分）―cf. トビグサなどの形は大分県その他にある。

対馬方言の性格

対馬方言の性格

- ③③ たんぼば || テクサレバナ (厳原) — cf. 近畿など各地では、彼岸花の意。
- ③④ 欲ばり || ガンドー (大部分) — cf. 強盗の意のガンドーは奥羽など各地 同 || ヨクガンドー (小浦・今里)
- 同 || ヨクドーガン (仁位) 同 || ヨクゼー (瀬) 同 || ヨコズナ (小茂田) — cf. ヨクズラその他の形は宮崎県などにある。

③⑤ 吝嗇者 || ニビ (今里)

③⑥ 金持ち || ヤンバン (比田勝・佐護・久和) — cf. 朝鮮語出自形。

③⑦ 咽喉 || ノード (豆酸) 同 || ノドンス (大部分)

③⑧ 涎 || ヨナダイ (豆酸)

③⑨ 臂 || ヒジデ (久根) 同 || ヒンギシ (狩尾・津柳) — cf. ヒンジキ・ヒンジンなどの形は九州各地にある。

④⑩ 腕 || ゴテー (大部分) — cf. グテーは鬼界島等にある。

④⑪ 脛 || コーゲーズネ (大部分)

④⑫ 踝 || メクギ (仁位・厳原・豆酸) — cf. メスキの形は遠江にある。

④⑬ 尻 || ケッタブラ (下県) — cf. シッタブラは九州各地にある。

④⑭ 筒袖 (or それに準ずる仕事着) || トージン (瀬・豆酸) 同 || トンジン (内院) 同 || テッポトージン (内山)

④⑮ 袖無し || カタスケ (比田勝・佐護・舟志) — cf. 沓岐や九州各地でカタスケは肩当ての意。

④⑯ 刺身 || セギリ (多い) 同 || スギリ (内山・内院)

④⑰ 台所 || ダシ (比田勝・佐護)

④8 井戸Ⅱツツミ〔orん〕（下県南部） 同Ⅱツ〔orち〕チー（舟志・阿連・小茂田・久根）―cf. ツツミは全国各地で池や沼の意。

④9 松の落葉Ⅱイボラ（小船越） 同Ⅱエベラ（琴） 同Ⅱタテクサ（多い）

⑤0 飯櫃Ⅱコバチ（津和原・唐舟志・琴）

⑤1 箆Ⅱタカゲ（舟志）―cf. 五島などでは飯箆の意。

⑤2 背負箆Ⅱスカリ〔orル〕（多い）―cf. 関東地方各地などでは網袋の意。

⑤3 東子Ⅱササラ（豆酸）―cf. サワラは九州各地にある 同Ⅱシヨーラ（大浦）―cf. ソーラは西日本各地にある。

⑤4 桶Ⅱヒョーゴ（久和）―cf. 洗米を入れる桶の意のシヨークは滋賀県など。

⑤5 木槌Ⅱドンズ（阿連） 同Ⅱモクズチ（久和） 同Ⅱサツス（佐須奈）―cf. サシズチは九州各地。

⑤6 鍬Ⅱパ（久和・内院・瀬）―cf. 南島黒島や波照間島でバイ・ペー。

⑤7 案山子Ⅱカボシ（内山・内院・豆酸）―cf. 長崎県西部にはカラストボシなど。

⑤8 お手玉Ⅱフセ（琴・仁田・鹿見・三根・豆酸）

⑤9 隠鬼Ⅱゴジューカゴミ（佐護・舟志・加志）―cf. ーカゴミは杵岐などにもある。

⑥0 鬼ごっこⅡセメセメ（比田勝・豊・佐須奈・佐護）―cf. セメコの如き形は福島県その他にもある。 同Ⅱトラ

バトリ（仁位）

⑥1 竹馬Ⅱユキグミ（下県各地） 同Ⅱユキブミ（仁位）―cf. ユキアシ・ユキウマ・ユキゲタの如き形は、九州各地

その他にある。

⑥2 肩車Ⅱテングビ（琴） 同Ⅱテングマ（佐須奈・仁田・小茂田）―cf. テングルマは九州各地にある。

対馬方言の性格

対馬方言の性格

㊦ 胡坐^コテツ^ツチヨ (多い)

同^コゲンガタ (下県南部)

同^コゲンザ (琴)

同^コドンザ (竹敷)

同^コオトコセー (上槻)

㊧ 歩く^コアユム (大部分)

㊨ 掘る^コパル (大部分)

㊩ 潜る^ココンブル (浅藻) — cf. 水中を歩いて渡る意のコブルは山口県・高知県など。

㊪ 美しい^コテーテー (久和) — cf. 八丈島でテーチケ。

㊫ まじめな^コマッスギー (多い)

㊬ さようなら (別辭) ^コザットーヤ (大部分)

四 対馬方言の系統——筑前方言との共通性

全国的に見て対馬方言はどの地方の方言に近いか——これまた難問題であるが、一おう、北九州特に筑前方言（一時代前の筑前方言をふくめて）に近いと言えようか。

先ず、対馬方言のアクセントは、平山輝男氏（『九州方言音調の研究』273頁）・金田一春彦氏（『対馬の自然と文化』91頁）説の如く、明らかに、沓岐及び筑前アクセントと酷似している。

(イ) 例えば、対馬諸方言における一拍名詞や動詞・形容詞のアクセントは、下記の如き一型であるが、これは、その型の姿までふくめて福岡（筑前式）アクセントと全く同様である。

一拍名詞^コ ●^コ▽^コ名^ナが^ガ・衆^サが^ガ・碑^ヒが^ガ・日^ヒが^ガ・火^ヒが^ガ

- 111 -

対馬方言の性格

④ 福岡市

① ○●▽∥概ね一・二・三類 (蟻・梅・石・川・犬・山) その他少数 (亀・琴)
 ② ○●▽∥概ね四・五類 (息・糸・雨・猿) その他 (牛・柿・紙・弦・海苔・痣・孫) 第二拍狭母音のものがめだつ様であるが、その辺なお検討を要する

少くとも、豆酸や内院など下県南部のアクセントは、「一・二・三類／四・五類」という対立を示す点において、福岡アクセントと一致する。それらはおそらく、下記の如き過程を経て――つまり、福岡式における○●▽型の中、第二拍狭母音のものが、そのアクセント核を保ち得なくなつて――成立したのであろう。

福岡式	
一・二・三類	四・五類
○ ● ▽	● ○ ▽

↓

豆酸式	
一・二・三類	四・五類
{ ○ ○ ○ ○ ● ▽ ▽ } (庭) (道)	● ○ ▽

↓

内院式	
一・二・三類	四・五類
{ ● ○ ○ ○ ● ▽ ▽ } (庭) (道)	● ○ ▽

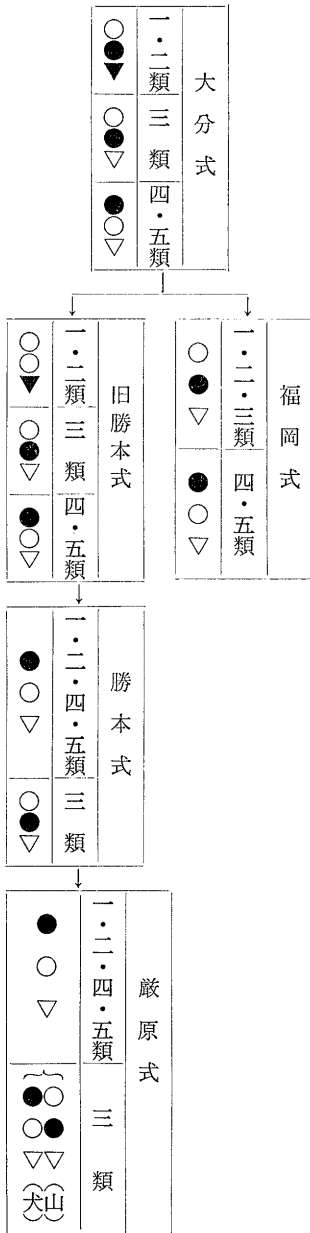
なお、金田一春彦氏 (『人文』1号79頁・『対馬の自然と文化』97頁) は、福岡 (筑前主流) 方言における二拍名詞アクセントを、次の様に示していられる。

一・二類	三類	四・五類
{ ● ○ ○ ○ ● ▽ ▽ } (庭) (道)	○ ● ▽	● ○ ▽

この説によれば、福岡式は、「一・二類／三類／四・五類」という対立を示す事になり、福岡式→豆酛式という直接的な系譜関係は認められないわけであるが、私の調査（被調査者は、西区百道の堤和男氏大正七年生―など、年配の福岡人数名）結果に関する限り、一・二類と三類との間に、積極的な区別は認められなかった。

牛（^{ウシ}一類）・紙（^{カミ}二類）の如きが●○▽型になる点は、金田一氏説を裏付ける様であるが、しかし、貝（^{カイ}靴・海苔（^{クワ}）など、三類語の●○▽型も或程度存する。また、痣（^{アザ}・桑（^{クワ}）孫（^{マゴ}）など、第二拍広母音語にも●○▽型がかなり認められるのである。現在の福岡アクセントに関する限り、一おう、《一・二・三類を通じて概ね○●▽型、少数の例外が●○▽型になる》と見るべきであらう。

一方、敵原式アクセントの「一・二・四・五類／三類」という対立はかなり特殊な様であるが、しかし、その型の相から見た場合、○●▽型と●○▽型との二型式であり、いわゆる無核型（平板型）が存しない点、福岡式と同様である。系譜的には下記の如く、沓岐西北部（勝本）式に最も近く、福岡式とは従兄弟ぐらいの關係にたつものと見なされる。



対馬方言の性格

アクセント以外の面に関しても、或程度同様の傾向性が認められそうである。

例えば、対馬諸方言では、左記の如く、共通語のクワ（またはクワ）音に対応するバ音形がしばしば認められるが、この現象が、古い博多方言の特徴だった事は、ロドリゲスの夙に指摘している所なのである。

バ（↑^{クワ}） || 久和・内院・瀬など。

パズ〔orジユ〕ン（↑クワズミ、桑実） || 津和原・伊奈・豆酸など。

四—— 豊前・筑前・肥前各方言との相关性

従来、対馬方言については、「音韻の面では筑前方言に近く、語法の面では豊前豊後方言に近い」（『人文』1号65頁）という様な説が有力であるが、音韻の面と語法の面との間にその様な差を認めるのは、一寸不合理に感じられる。

例えば、《対馬における形容詞語尾が、高力の如きカ形でなく、高^{タケ}イの如きイ形である事を以て直ちに、豊日系と見なさ》れる場合があったわけであるが、しかし、筑前の東部―北九州市一部をはじめ、遠賀郡・宗像郡・直方市・飯塚市・山田市・鞍手郡・嘉穂郡・朝倉郡の全部または一部―や、筑後浮羽郡東部などでは、対馬と同様、イ語尾が有力なのである。

つまり、対馬方言は、その音韻・語法・語彙などいろんな面において、筑前方言と同様、《肥前など九州西北部と、豊前など東北部との中間的性格》が著しいわけである。そう言えば、前記筑前及び対馬・杵岐のアクセントなどにも、或意味で、《豊前の乙種式と肥前の二^が型式との中間的性格》が認められよう。

なお、九州方言については、従来、『東部の豊日式、西部の肥筑式、南部の薩隅式』の如く、三分される事が多いが、筑前方言はむしろ、豊前式と肥前式の中間的なものと見なすべき事、金田一春彦氏説（NHKの『全国方言資料 6巻』20頁）の如くなのである。

以下、やや蛇足ながら、対馬方言が、『豊前式と肥前式との中間的性格』という点において、筑前式に似ている例を、若干示してみよう。

① 上二段活用⇨豆酸・佐護など対馬周辺部では、起クルの形が或程度存するが、島の中央部では多く、起キルの形が用いられる。―cf. 肥前では上二段活用が存しない。ただし、対馬の上二段式は、豊前方言の場合ほど著しいものではない。例えば、起クルはかなり存するが、落ツルの上二段式は少い（オチル又はオテル形が用いられる）点など、豊前式よりもむしろ筑前式に近い様である。

② 意志法⇨起キョー（島大部分）起キョー（厳原など）―cf. 肥前地方は起キユー形が著しく、また、豊前では共通語と同様の起キョー形が著しい。対馬大部分の起キョー形は、起キユー⇨起キョーの変化における中間形と見なされる。尤も、肥前などの起キユー形については、起キョー形からの変化形（o⇨uという一般的傾向が見られる）と見なす立場もあり得る故、なお検討を要する。

③ 敬語法⇨来ラル（ル）（多い）コラシヤル（三根・志多賀・櫛・佐賀・豆酸）キナハル（佐賀・小綱・厳原・小茂田）―cf. 一般に敬語辞の地域差は複雑であり、なお今後にまつ面も多いが、大局的にはやはり、筑前方言に近いと言えよう。

④ 逆接助詞⇨バッテ（島周辺部）ケン（orッ）ドン（島中央部）―cf. 肥前など西九州はバッテン形が著しく、豊前など東九州はケンド形が著しい。しかして、筑前東部では、対馬と同様、両形が並存している様である。

対馬方言の性格

対馬方言の性格

⑤ 対格助詞 ㄱ 本オバ(多い) 本オ〔or〕(中央部) 本バ(比田勝など) ㄱ cf. 肥前など西部は本バ形が著しく、豊前は本オ形が著しい。対馬にはやはりその中間的性格が認められるのである。

⑥ ai 連母音 ㄱ 豆酸・伊奈など周辺部では、へー(蠅)・デーコン(大根)の如き融合変化形が著しいが、島中央部では概ね、ハイ・ダイコンの如く発音される。ㄱ cf. このエー(e:)形は、肥前(ja:形が多い)よりも豊前に近い。しかし、対馬の大部分において、ai↓e:の傾向は豊前方言の場合程著しいものでなく、むしろ、筑前方言(ai連母音の変化著しくない)の状態に近い。

⑦ セ音 ㄱ 豆酸など周辺部では、アシエ(aie:汗)・シェ(ee:瀬)の如き口蓋化音が著しいが、島中央部では概ねase・seの如く発音される。ㄱ cf. この状態も又、口蓋化音seの著しい豊前方言や肥前西部方言よりもむしろ、筑前方言や肥前東部方言に近い。

更にこの場合、筑前方言との関係はさておき、対馬方言の形態素的特色――従来の説にいわゆる語法的特色――が、肥前など西北九州方言と、豊前など東北九州方言との何れに近いかを考えて見ても、左記(i)(ii)の如く、その両者が認められる。「対馬方言の語法的特色が、肥筑式より豊前式に近い」という様な事は、義理にも言えないわけである。

(i) 対馬方言と肥前式方言との共通性

① 接続助詞シテ ㄱ 対馬は肥前方言などと同様、高ウシテ形が著しいが、豊前方言はむしろ、高ウテ(orチ)形が普通である。

② 準体助詞ト ㄱ 対馬は肥前方言などと同様、高イトガの如き準体助詞トが著しいが、豊前ではそれが稀である。むしろ、ソヤスの形がしばしば認められる。

③ 文末助詞Ⅱ対馬は肥前方言などと同様、バイ・タイの如き形が頻用されるが、豊前方言ではそれが稀である。
(4) 対馬方言と豊前式方言との共通性

① 丁寧法Ⅱ対馬は概ね、豊前方言などと同様済ミマセン形であり、肥前式の如き済ミマッセン形は稀である。

② 主格助詞Ⅱ肥前方言では主格ノ（orん）が著しいが、対馬は豊前方言などと同様、それが少い。

個々の語彙論的現象―特に意義素的な語形式―に関して、余り細かい地域差を論ずる事は難しいわけであるが、しかし、ごく大局的に見た場合、対馬方言の語彙はやはり、筑前など北九州方言との共通性―または類似性が注目されようである。

下記①～②③の如きは、対馬各地に認められる語形の中、筑前はじめ北九州方言との関係が著しいものの一例である。尤も、これらはあくまで、《相対的な立場において、南九州方言よりも北九州方言に多い》という事であり、《南九州方言に全く認められない》現象というわけではない。また、これは、南九州よりも北九州に多いというだけであり、《九州以外の諸方言に存しない》現象という様な意味でない事勿論である。

① 梟Ⅱネコドリ（大部分） ② せきれⅡシリタタキ（佐須奈） ③ 蛇Ⅱナガムシ（大部分） ④ 蝮Ⅱヒラクチ

（大部分） ⑤ なめくじⅡナメクジリ（大部分） ⑥ 蜻蛉Ⅱエンバ（大部分） ⑦ 松毬Ⅱマツングリ（大部分）

⑧ 甘藷Ⅱトイモ（豆酸） ⑨ 南瓜Ⅱボーブラ（大部分） ⑩ どくだみⅡジューワク（大部分） ⑪ とげ〔棘〕Ⅱイ

ゲ（大部分） ⑫ 玄孫Ⅱヤシワマゴ（大部分。ヤシユワマゴ・ヤシヤマゴなどの形もある） ⑬ 旋毛Ⅱギリギリ（大部分）

⑭ 唇Ⅱクツツバ（大部分） ⑮ 顎Ⅱアギ（仁位・小茂田・久根） ⑯ 踵Ⅱキビシヤ（大部分）・キビス（仁位）

⑰ ものもらいⅡイヌノクソ（大部分） ⑱ 垢Ⅱコケ（佐須奈・佐護・仁位） ⑲ 筒袖Ⅱテクリ（安神・久根）・チク

リ（佐護） ⑳ 家の庇Ⅱキツカケ（大部分） ㉑ 飯櫃Ⅱイビツ（安神・久根） ㉒ 隠鬼Ⅱカゴミ（佐護）・ゴジュー

対馬方言の性格

カゴミ (舟志・加志)

㊦ 坐るⅡイドル (大部分)

四―二 いわゆる対馬方言の非九州弁的要素について

また、従来においては、「対馬方言に関する非九州方言的要素」が強調されがちであるが、どんなものであろうか。勿論、対馬方言には、前述の如く、肥前方言よりも豊前方言に近い面が或程度認められ、それはそのまま非九州方言的要素と見なされる場合が多い。また、対馬には、浅藻・赤島・水崎など、本州からの集団移住によって開かれた部落があり、そこでは当然、非九州的―というよりもむしろ非対馬的―方言が著しい。

しかし、全体として見た場合、対馬方言はやはり、九州―特に北九州方言との相関性が著しい事、前述の如くである。なお、ここで注意すべきは、下記①～⑩の如く、『いわゆる対馬方言の非九州弁的要素に関し、老岐をはじめ九州属島諸方言との共通性が或程度認められる』という事。この場合、老岐との共通性については、或程度前述した所であり、至極当然の事とも言えそうであるが、しかし、下記①～⑩の如き九州西南部属島諸方言との相関性は誠に興味深い。この辺の事情も、対馬方言の性格に関する或面を物語っているのではなからうか。

① 例えば、対馬各地で、*kaye・kage* (影) など、語中尾ガ行子音に関する鼻音性がしばしば認められるが、これも直ちに非九州方言的要素と断定する事はできない。九州諸方言においてカ行鼻濁音が稀な事は言うまでもないが、しかし、五島や屋久島・口永良部島・種子島など属島諸方言では、『日本言語地図』第1・2図でも示される様に、*ㇿ・g* の如き鼻濁音がしばしば認められる。対馬方言のカ行鼻濁音については、近畿以東に存する本州諸方言のそれと関係づけて考えるよりも、やはり、五島など九州属島諸方言の場合と関係づけるべきであろう。尤も、『それから諸島の鼻濁音が、九州方言の古い姿を反影しているかどうか』については、なお今後にまつ所が多い。

② 牝馬の意のゾーヤク（対島大部分） 九州には比較的少く、むしろ東日本諸方言に多い様であるが、しかし、種子島・鬼界島などではかなり用いられている。

③ 水田の意のタバル（琴・仁田・仁位・小茂田） 九州には稀であるが、甕島のテーバイ形などは、一おうそれと関係づけて考えられる。

④ 竹馬の意のユクグミ（下県各地） 九州には少いが、五島のユキゲタなどは一おう考え合わされる。

⑤ 桑実の意のナリ（舟志など） 九州では稀であるが、薩南諸島における果物の意のナリ形などが考え合わされる。

⑥ 小笹の意のタカゲ（舟志） 九州では稀な様であるが、五島では飯簞の意のタカゲ形が存する。

⑦ 歛の意のパ（久和・内院・瀬・豆酸） 九州には稀であるが、天草や沖縄その他には、パ・パイ・ペーなどの形がある。

⑧ 案山子の意のカボン（下県南部） 九州では稀であるが、五島のトボン形などと関係があるのかもしれない。

⑨ 隠鬼の意のカゴミ（佐護）・ゴジユーカゴミ（舟志・加志） 九州では少い様であるが、沓岐にカゴミまたはカゴミカゴミ形がある。

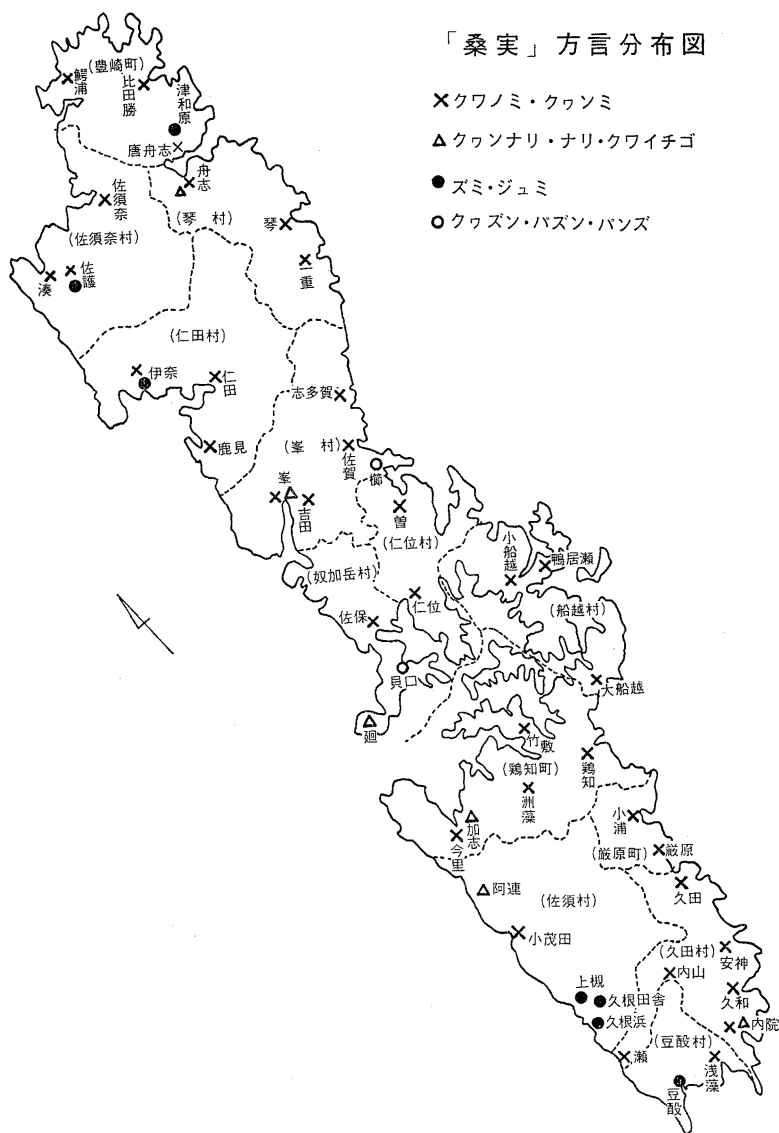
⑩ 鬼ごっこの意のオニモーヤ（雞知）・モーヤゴト（厳原） 九州西南部にも似た形が若干存するが、やはり天草島など属島に著しい様である。

付 対馬方言分布図二つ

以下、参考までに、桑実および井戸に関する対馬方言分布図を掲げておこう。その前者は、島の中央部と周辺部とが言語的に対立する例であり、後者は、豆酸など下県南部の言語的特異性を示す例である。

「桑实」方言分布图

- ✕クワノミ・クワンミ
- △クワンナリ・ナリ・クワイチゴ
- ズミ・ジュミ
- クワズン・バズン・バンス



「井戸」方言分布図

× イド

△ カワ・カマ

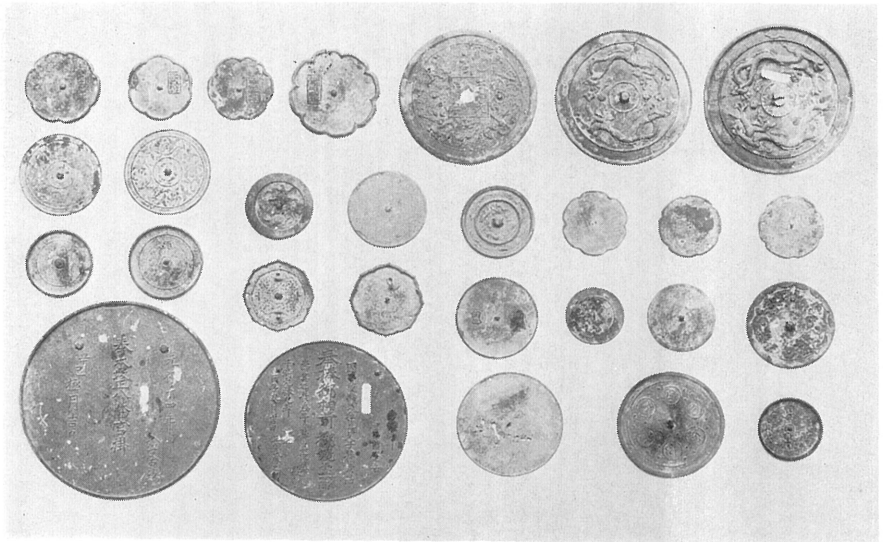
○ 昔ツツミ系の語を使った

● ツツミ・ツツン・ツチン・ツチー・チチー

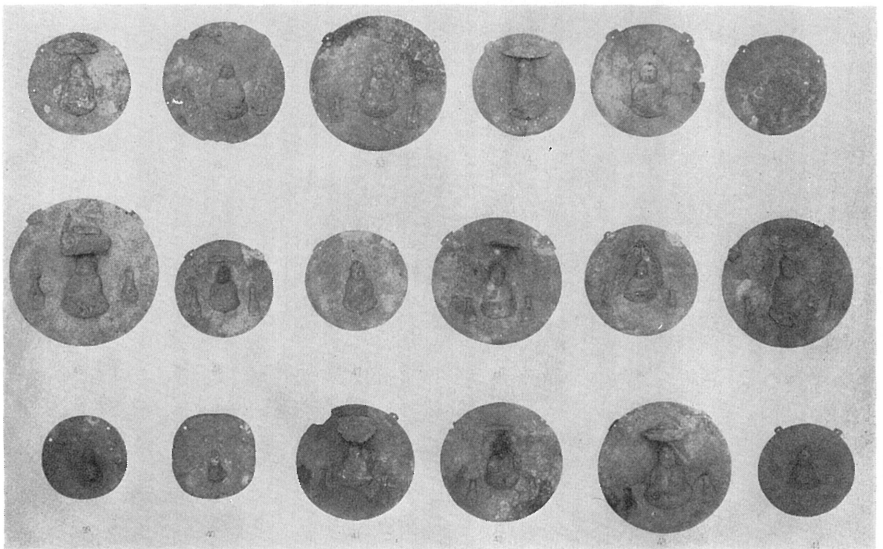




峰村 海神神社 如来形立像



峰村 海神神社 神鏡



上対馬町 霹靂神社 懸仏



巖原町 法晴寺 菩薩形立像



豊玉村 観音寺 観音菩薩像



巖原町 大興寺 釈迦如来像



巖原町 豆酸観音堂 銅金鼓



巖原町 古藤家 金銅大合子